『伊勢物語』第六十三段 ： 古注に登場する牽牛と織女説話

著者	木戸 久二子
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	10
ページ	83-92
発行年	1999-06-27
URL	http://hdl.handle.net/10076/6534

『伊勢物語』第六十三段

――古注に登場する牽牛織女説話――

木戸久二子

はじめに

『伊勢物語』第六十三段、いわゆる「つくも髪」の章段は、昔男と年老いた女との恋を描いた話として著名で、『伊勢物語』の中でも特異な一段である。

老いてなお色好みの女が、何とかして思いやりのある男に愛されたいと思い、三人の息子たちに作り話の夢語りをする。上の二人は全く相手にしないが、親孝行の末息子だけは、何とかして在五中将に逢わせてやりたいと思い、業平に直訴する。業平は心を動かされ、やって来て一夜を過ごすのである。

これは、在原業平とおぼしい主人公の一代記の形をとる『伊勢物語』において、「在五中将」という業平その人の名が本文中に登場する唯一の部分でもある。

本稿では、『伊勢物語』の冷泉家流古注がこの第六十三段の歌に引用する本説について、同じものを載せる同時代の『古今集』注釈書や謡曲、物語類と絡めて論じてみたい。

一

『伊勢物語』第六十三段で、女は一度きりで訪れの途絶えてしまった男恋しさに自分から出掛けていって、垣間見をする。のぞかれているのに気づいた男は、「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ」（注1）という歌を詠む。

この歌に対し、神宮文庫蔵『伊勢物語注本』（注2）（以下、『注本』と略称する）は、

此哥は・續万葉集七巻ニ・恋の部也・作者山上憶丸か哥也
・此哥の心ニ二義あり・一ニは・牽牛織女の義・二ニは
・百鬼夜行神の義也・伯撰ニあり　（中巻）

と注記する。また、慶応義塾大学図書館蔵『伊勢物語註』（注3）（以下、『慶応本註』と略称）は、

モ、トセニノ哥ハ山上良丸哥也　問云モ、トセト云事心エス　后ハ四十業平ハ廿五ト見タリ　如何

と記し、それに対して「答二義アリ」として、「牽牛織女」と

「百鬼夜行」の二つの本説をあげている。

一方、『伊勢物語』の冷泉家流古注を代表するものとして知られている、宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』（注4）は、

つくもがみとは、百鬼夜行の事也。陰陽記云、狸狐狐狼之類満百年致人恠喪、故名属喪神（ツクモガミ）といへり。是はりとうころうとう（狸狐狐狼等）のけだ物、百年いきぬれば色々のへんげ（変化）と成て人にわづらひをあたふ。是は必夜ありきてへんげをなすゆへに、夜行神ともいふなり。九十九といふ年よりへんげそむる也。仍百年に一とせたらぬつくもがみといふ。女九十九にはあらねども夜ありきて業平をのぞきてわびしく心くるしき喪（ワザハイ）をつくる故に付喪神（ツクモガミ）といふなり。又、海につくもといふもの有。人のかみのちゞみたるに似たり。年のよりたるひとのかみはつくものやうに成といふ心も有たれども、夜行神事、実義也。

とする。百鬼夜行説と海草説の二つを載せ、最後には「夜行神事、実義也」と百鬼夜行説を強調して締めくくっているのだが、『注本』・『慶応本註』が最初に記す「牽牛織女」説には全く触れていない。

「百鬼夜行」を持ち出すのは、何よりも「百」という数字の連想からなのであろう。本来は、「多くの」という意の「百」を年月とし、獣は百年生きると変化のものになって人を煩わすようになり、それを「属喪神」・「付喪神」というのだと説明を加えている。そして、女が夜中に出歩いて業平をのぞいては煩わす、ということを「付喪神」、つまり百鬼夜行のようだと記しているのである。

「百鬼夜行」とは、いろいろな妖怪が列をなして夜に出歩くことであり、中古・中世の文学作品に時々登場する。たとえば、『大鏡』「師輔伝」には、百鬼夜行に遭遇しても供の者たちは全く気づいていないという中、ただ一人師輔だけが冷静にそれに対処した様子が描かれる。師輔の超越性を示すエピソードの一つとなっているのである。

ところで、御伽草子に『付喪神（付喪神記）』（注5）という名の物語が存在する。その冒頭には、

陰陽雑記云、器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑す、これを付喪神と、号すといへり

是によりて、世俗、毎年立春に、さきたちて、人家のふる具足を、払いたして、路次にすつる事侍り、これを煤払といふ、これ則、百年に一年たらぬ、付喪神の災難に、あはしとなり

とある。「陰陽雑記云」と記している点が、「陰陽記云」とする書陵部蔵『伊勢物語抄』との影響関係を思わせるし、「百年に一年たらぬ、付喪神」という部分は、『伊勢物語』第六十三段の「百年に一年たらぬ……」の歌を踏まえていることは明らかであろう。

ただし、「百鬼夜行」という語は『付喪神』の本文中には一度も登場しない。しかし、「或は、男女老少の姿を現し、或は、

魑魅悪鬼の相を変し、あるひは、狐狼野干の形をあらはす」と表現されている化生のものたちの様子は、まさに百鬼夜行にほかならない。また、化生のものたちに出会った関白殿下が、尊勝陀羅尼のお守りによって撃退することができたという筋は、『大鏡』の師輔の話によっていると思われるのである。

この『付喪神』の主題は、「不用の古道具類が化生の者・妖物となって仏性を得たという非情成仏、悉皆成仏の趣旨を説こうとする」（注6）ということで、作者は「真言密教の徒であろうと思われる」とされている。『伊勢物語』本文の解釈において、冷泉家流古注などが真言密教を少なからず用いている事実を考え併せ、御伽草子『付喪神』は冷泉家流古注の影響による作品と見ておきたい。

さて、『注本』では内容を略しているのだが、『慶応本註』が詳しく載せている「牽牛織女」の本説を、少し長くなるが次に示そう。

史記云瓊在二夫一婦一夫云二遊子一女云二伯陽一百三余陽百一不レ足契二借（偕）一老一者子二八之候陽三四之旬愛二玉兎一而終一夜坐二道路一之口一暮徊二遠郷一暁登二山一峯一挙下而勿二絶時一陽没之刻成二深一歎一月前進得二相一見一依二此執一生レ星再下二陰一陽之国一生二道一祖半一立之二一神一主二男一女会一合之媒一

瓊国ノ名也　遊子伯陽ト云人夫十六妻十二ニテ夫妻トナレリ　共ニ月ヲ愛シテスキシ程ニ妻ノ伯陽九十九ニテ死ヌ其時遊子百三ノ年ナルニ夫歎テ云「汝死者誰トカ月ヲモ見ヘキ」ト云フ　陽云「我死トモ必ス月ヲ見ヘシ　我来テ月夜ニハ必ス可レ見」ト契リ終死ヌ　即葬送スレハ年比カキケル鳥ニ乗テ天ヲ飛テ失ヌ　或夜ナク〳〵月ヲ見ニ此女鳥ニ乗テ来レリ　形ヲハ見レトモ物云事ナシ　弥ヨ悲ヲナス程ニ夫ノ遊子カ思ヒ切ニ成テ白鵲（カサヽギ）ニ乗テ天ニ上ヌ　我妻ヲ尋テ行ニ天河ヲ隔テエワタラス　サテ□星ト成レリ　而ルニ七月七日相コトハ天河水□尺ノ宝瓶ニソヽク程ニ惣テ此河ヲ汚コトナキ也　況ヤ婬事ヲ犯事不レ可レ思一寄七月七日ハ帝釈ノ善法堂ヘ入堂之隙ナリ　サテ此日相ト云ヘリ　烏ト鵲ト羽ヲサシチカヘテ二星渡トモ見タリ　又木ノ葉ヲ口ニクハヘテ橋ニワタストモ見タリ　紅葉ノ橋トモヨミタリ　又云二星別ヲ悲テ血涙ヲ流スカ鵲ノ白羽ヲ染レハ紅葉ト云トモ見タリ

漢書伝云烏一鵲橋口敷二紅葉一二一星屋一形前風冷

此故ニ織女ヲツモヽ神ト云也　女ヲ守ル神也　牽牛ヲツクイ神ト名ク　女ヲアタフル神トカケリ　続伊神（ツクイカミ）也

今までにも何度か論じられてきた、遊子・伯陽の七夕説話である（注7）。

『伊勢物語』第六十三段の「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ」という歌と七夕説話の一体どこが関係あるのか、と思ってしまうが、妻の伯陽が死んだときに九

十九歳であった（「陽百一不レ足」）という点に、何よりも着目していると思われる。さらに終わりの方には、織女を「ツモ、神」、牽牛を「ツクイ神」・「続伊神」というとあるので、「つくも髪」との音の近似によるのであろう。

ところで、『伊勢物語』の冷泉家流古注の中で、この七夕説話を載せる本がもう一本ある。鉄心斎文庫蔵の『伊勢物語奥秘書』（注8）（以下、『奥秘書』）である。

この『奥秘書』は『注本』と『慶応本註』に近い部分を少なからず見せるのであるが、この「百年に……」の歌に関しても、百鬼夜行説を記した後、「又他説古注に……」として遊子・伯陽説話を引用する。ただし、「ツモ、神」・「ツクイ神」の記述はなく、遊子は百三歳だったから生きたままで天に行けたのだと記した上で、「百年を過れは皆つくも神と成也　今の老女のおそろしき姿にて来て我を恋るは化物てやあるらんと読り」と締めくくる。先に見た、書陵部蔵『伊勢物語抄』の百鬼夜行説を思わせる解釈になっているのである。

また、『奥秘書』は遊子のことを「黄帝に四十人の子あり最末の子なり」と説明するが、これは『江談抄』第六「遊子為二黄帝子一事」の遊子と道祖神の関係について述べた部分からの引用である（注9）。百鬼夜行と牽牛織女を絡める解釈と言い、『奥秘書』の、諸注集成としての性格が現れた一例と言えようか。

細部でいろいろな説を展開する『伊勢物語』冷泉家流古注諸本における『注本』と『慶応本註』との近さについては、片桐洋一氏が「この例（第三十二段の「もの言ひける女」を『注本』と『慶応本註』だけが四条の后とし、他は小野小町とする点＝木戸注）以外でも、神宮文庫本注本と慶応本註の関係の近さを思わせる例は確かにある」（注10）と指摘しているし、以前私も触れたことがある（注11）。

さらに言えばこの第六十三段、「百年に……」の歌の作者を『注本』は「山上憶丸」、『慶応本註』は「山上良丸」としていた。どちらかの書写上の誤りとも考えられるが、山上憶良を思わせる人物の名を一方は上をとって「憶丸」、もう一方は下をとって「良丸」として独自の色を出したと見る方が自然であろう（注12）。山上憶良には『万葉集』巻五「沈痾自哀文」に「是時年七十有四鬢髪斑白」（注13）と、鬢にも髪にも白髪が混じって……、という記述があるので、あるいはそこからの連想であろうか。しかし、「百年に……」の歌に憶良だと注記するものは管見に入った限りでは『注本』・『慶応本註』以外には見当たらず、両者の関係の近さを証明するものである。

二

二条為家の息子の一人である為顕の流派の偽書とされるものに、『古今和歌集序聞書　三流抄』（注14）（以下、『三流抄』と略称）という『古今集』の序のみの注釈書がある。この聞書

にはさまざまの書名で十六本の存在が知られるが（注15）、東京大学図書館所蔵本の奥書の終わりに、「定家余風　能基」とあることから、『和歌大辞典』には『古今和歌集序聞書　能基』として採られている（注16）。しかし、どの伝本でも冒頭に「古今に三の流あり。一に定家、二に家隆、三に行家」とあるので、片桐氏の命名により『三流抄』と呼ばれるようになり、その名称が一般化している。

鎌倉時代の末から室町時代の初めにかけて、この『三流抄』系統の注が謡曲や物語などの文学作品に多大な影響を及ぼしていたことはすでに明らかにされてきている。また、語の典拠を記す際に引用される本説・本文においての『伊勢物語』冷泉家流古注との一致は、拙稿（注17）でも指摘したところである。

さて、『慶応本註』・『注本』が載せる遊子・伯陽夫婦の七夕説話を、『三流抄』（下）は仮名序の「月をおもふとてしるべなきやみにたどれる」（注18）の条で引用する。先に載せた『慶応本註』と同じ内容の本説を長々と記した後に「サラバ、知ベナキ闇ニ迷トハ、遊子伯陽ガ月ヲ待テ、暮ノ闇ニ迷ヒシ事ヲ云也」（二五八頁）と見えるが、結局は彼らが異常なほど月を愛していたことと関係する引用なのであろう。前章で見た『伊勢物語』古注との引用場面の違いには驚かされる。

また、『三流抄』と同種の『古今集』古注釈として早くから知られていたものに、現在は片桐洋一氏所蔵の『毘沙門堂本古今集注』（注19）（以下、『毘沙門堂本注』）がある。

『三流抄』が遊子・伯陽の説話を引いている仮名序の「月をおもふとてしるべなきやみにたどれる」の部分では、『毘沙門堂本注』は「此ハ遊子カ事也　奥ニアリ」と簡単に記した上で、巻第四秋上の一七四番歌「久方のあまのかはらのわたしもり君わたりなばかぢかくしてよ（題しらず　よみ人しらず）」の注記に詳しくこの説話を引用している。一七四番歌は、『古今』秋上に十首余りの七夕歌が並んだ中の一首であり、遊子・伯陽の説話が、この夫婦が死後に牽牛・織女の二つの星となる七夕説話であることを考えると、最も納得のしやすい場面での引用だと言えようか。

『古今』の注同士であり、本説を多用するという同じ性格を示す『三流抄』と『毘沙門堂本注』ではあっても、引用する箇所も事項も異なっているという現象が見られるのである。

前章で見た『慶応本註』が載せている遊子・伯陽説話と『三流抄』・『毘沙門堂本注』のそれとを見比べると、一つの事実に気づく。『三流抄』・『毘沙門堂本注』の該当部すべての引用は長くなるので略するが、両者が説話の最初に載せる漢文の部分には、『慶応本註』に存在する「百三余陽百一不レ足」が見えないのである。ただし、漢文の後の説明部分には「伯陽九十九ニテ死ス」（『三流抄』）・「妻ノ伯陽九十九ニテ死ケリ」（『毘沙門堂本注』）とある。両者に遊子の年齢の記述はないものの、彼らの結婚時の年齢（「契ニ偕老一二八之候三四之旬」）から、死んだときの遊子百三歳という年齢はもちろん推

測可能である。

この説話を載せる他の例を見ると、次の章で触れる『鴉鷺合戦物語』には「遊子ことに歎きて百三にして死せり」（注20）とあるが、謡曲「鵜飼」・「朝顔」は年齢には触れず、『曾我物語』は伯陽が九十九歳という記述のみである。

もちろん、同じ説話を引用しているとは言いながら、それぞれに省略したり読み下し方が違ったりと、細部で少しずつ異なっているのは当然のことである。しかし、その中で『慶応本註』が特に「百三余陽百一不レ足」と年齢にこだわっているように思われるのは、「百年に一年たらぬ……」という歌の本説としては絶対欠かせぬ部分であるからなのだろう。

三

『伊勢物語』冷泉家流古注の『注本』・『慶応本註』・『奥秘書』と、『古今集』注釈書の『三流抄』・『毘沙門堂本注』が引用する遊子・伯陽の七夕説話を見てきたわけであるが、謡曲の「鵜飼」でも簡略に遊子と伯陽について語っている。

伝へ聞く遊子伯陽は　月に誓つて契りをなし　夫婦ふたつの星となる（注21）

「鵜飼」にこの説話が登場する理由については、「「月」は「篝火」「鵜舟」と縁語」（注22）と説明されている。加えて、「鵜飼」で遊子・伯陽について触れる前後には、「鵜舟にともす篝り火の　後の闇路をいかにせん」・「月の夜頃を厭ひ　闇になる夜を喜べば」・「鵜舟にともす篝り火の　消えて闇こそ悲しけれ」と、「闇」という語が見える。『三流抄』が、『古今』仮名序の「月をおもふとてしるべなきやみにたどれる」にこの説話を引いていることとも関連があるのではないだろうか。また、一つの文で簡略に引用する「鵜飼」で見えないのは無理もないが、普通、遊子・伯陽の説話には、星になった二人の一年に一度の逢瀬に欠かせない存在としてカササギが登場する。「鵜飼」の鵜とカササギ、という鳥の連想もあるかと思われるのである。

「鵜飼」よりかなり詳しい引用の「朝顔」の場合は、朝顔が別名を「牽牛子」・「牽牛花」（注23）ということからの引用である。

曾我兄弟の仇討ちを扱った『曾我物語』（注24）では、源頼朝との仲を裂かれて他の男に嫁がされようとした北条政子が、脱走して伊豆山へこもる場面で、

…ちぎりくちずは、出雲路の神のちかひは、妹背の中はかはらじとこそ、まぼりたまふなれ。たのむめぐみのくちせずは、末の世かけて、もろともにすみはつべしと、いのりたまひけるとかや。

そも〳〵、出雲路の神と申は、昔、けいしやうといふ国に、男を伯陽、女を遊子とて、夫婦の物有けるが…（中略）…牽牛織女これなり。また、さいの神とも申なり。

道祖神ともあらはれ、夫婦の中をまぼりたまふ御ちかひ、たのもしくぞおぼえける。（巻第二「兼隆聟にとる事」）

のように記されている。男女の縁を結び、その仲を守ってくれるという「出雲路の神」の本説としての引用である。ここでは、遊子・伯陽の夫婦が道祖神になったという点に特に注目しているようである。

ところで、遊子・伯陽の七夕説話を載せるものの中で、この『曾我物語』だけは男が伯陽で女は遊子という具合に、夫婦の名前が逆になっている。九十九歳で死ぬのは伯陽なので、つまりは夫が先に死ぬことになるのである。二人が結婚したときの年齢を述べる部分を省いているところを見ると、この名前の入れ替えは意図的な改変なのだろうか。うがった見方をすれば、逃げ出して恋しい男・頼朝のもとに行こうとするのは女の政子なので、死んだ相手を追いかける役目を妻に当てることにしたのだろうか。

異類軍記物の御伽草子『鴉鷺合戦物語』では、「鴉鷺、由緒ある御中なり」と、カラスとサギの由緒ある関係の本説として遊子・伯陽の七夕説話が引かれる。死んで星となった彼らが七月七日に逢う際に、「烏と鵲と羽をならべて橋となりて」天の川を渡すというのである。本来、「烏鵲の橋」の「烏鵲」はスズメ目カラス科のカササギなのであるが、『鴉鷺合戦物語』では、カラスと、コウノトリ目サギ科のカササギ（笠鷺）の二つに分けて解釈している。

先に見た『曾我物語』で主眼になっていた道祖神に関係する部分は、この『鴉鷺合戦物語』では完全に省かれてしまっている。逆に『曾我物語』においては、烏鵲の橋については一言も触れられていない。それぞれに必要とする部分のみの引用であることがよく分かる。

以上、この遊子・伯陽の説話がさまざまな事柄の本説として引用されている事実を見てきた。『三流抄』・『毘沙門堂本注』・『慶応本註』の『伊勢』・『古今』古注釈は、小異はあるものの遊子・伯陽説話のすべてを載せていたが、謡曲や『曾我物語』・『鴉鷺合戦物語』はそれぞれに取捨選択しての引用であった。注釈書が説明の根拠として引く本説と、物語があくまでも話の流れの中で載せる本説とでは、おのずとその密度に差が出るということなのであろう。それにしても、この遊子・伯陽の説話の広がりには驚きを禁じ得ない。当時いかに広く伝播していた説話であるのかが知れるというものである。

四

『伊勢物語』冷泉家流古注の中でも、『注本』と『慶応本註』は特に『三流抄』の流派と関係が深いことは本稿でも見たとおりであるが、『慶応本註』は『注本』よりもさらに『三流抄』の影響が色濃い。

『三流抄』や『毘沙門堂本注』に代表される中世の『古今』

注釈書は、仮名序の「ふじのけぶりによそへて人をこひ」、もしくは「今はふじの山も煙たたずなり」の部分に、かぐや姫の登場する竹取説話を引用する。そして、その時代の設定を、天武天皇の御代とする『三流抄』系統と、欽明天皇とする『古今為家抄』の系統とにおおむね分かれるらしい（注25）。

『慶応本註』は、『伊勢物語』第八段の「信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ」の歌に、竹取説話を本説として載せている。時代設定は「欽明天皇御宇」とするので、この点では『古今為家抄』の系統によっていると言える。しかし、帝の意を伝える勅使の名を、『慶応本註』は「宰相金丸」とするが、『古今為家抄』では「乙見丸」である。この勅使に関しては、「参議のかねまろ」とする京都大学附属図書館蔵の中院家旧蔵『古今序抄』（注26）が、『慶応本註』と近い。

ところで、宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』や『注本』など、『慶応本註』以外の冷泉家流古注は、管見に入った限り、どれも竹取説話を引いてはいないという事実が指摘できる。『伊勢物語』第八段の煙の立っている山は浅間山であって富士山ではないし、第九段では富士山は「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」と季節外れの雪が歌われているが、煙が立っているとは書かれていない。『慶応本註』は、山から立つ煙という点だけで、富士山ではない浅間山に関して竹取説話を記しているのである。この事実を見ると『慶応本註』は、同じ冷泉家流の古注の中でも、『三流抄』の類の影響を特に強く受けている注釈であると言えるのである。

おわりに

以上、『伊勢物語』第六十三段の「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ」の歌の解釈に、一部の『伊勢物語』冷泉家流古注が引用する本説――遊子・伯陽の七夕説話――について記してきた。『古今集』・『伊勢物語』の注釈や謡曲、物語など種々の事項に載せられる中で、それぞれの着目点の相違を明らかにすることができたかと思う。その説話自体の成立と成長についてはもちろんであるが、ある時代の文学世界における、説話の広がりの一例としても、興味の尽きない問題である。

注

1　『伊勢物語』本文は、学習院大学蔵（三条西家旧蔵）『伊勢物語』（鈴木知太郎校注『天福本伊勢物語』武蔵野書院、昭和38年／小林茂美校注『伊勢物語』影印校注古典叢書6、新典社、昭和50年）により、適宜表記等を改めた。

2　神宮文庫蔵『伊勢物語注本』。廣岡義隆・山口悦子・木戸久二子「翻刻『伊勢物語注本』（上）・（中）・（下）」（『三重大学日本語学文学』第三・四・五号、平成4・5・6年5月）。

3　慶応義塾大学図書館蔵『定家流伊勢物語註』（長尾一雄解題・翻刻、慶応義塾大学国文学研究会編『平安文学 研究と資料』国文学論叢第三輯、至文堂、昭和34年）。なお、翻刻には一切句読点等がないので、一文ごとに空きを入れた。また、底本あるいは翻刻の誤記と認められる場合、その下方の〔　〕の中に推定本文を示した。

4　宮内庁書陵部蔵冷泉家流『伊勢物語抄』（片桐洋一『伊勢物語の研究〔資料篇〕』明治書院、昭和44年）。なお、「固有名詞その他、特殊な用語については、右傍に振漢字を付けて、読解に便ならしめたところがある」という「凡例三」については、その下方の〔　〕の中に記した。

5　『付喪神記』（横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第九、角川書店、昭和56年）。

6　『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「付喪神」の項。

7　伊藤正義「謡曲の和歌的基盤」（『観世』昭和40年8月号）、「鵜飼――伝へ聞く遊子伯陽は」（『かんのう』昭和55年11月号、後に『謡曲雑記』所収、和泉書院、平成元年）、沢井耐三「『鵜鷺合戦物語』表現考――遊子伯陽説話の系譜と流布」（『愛知大学国文学』昭和60年3月）など。

8　鉄心斎文庫蔵『伊勢物語奥秘書』（『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第二巻、八木書店、平成元年）。

9　「遊子有二二説一。一者黄帝子也。黄帝子有二四十人一。其最末子好二旅行之遊一。」（『江談抄』第六、『群書類従』第二十七輯　雑部　巻第四八六）。

10　片桐洋一『伊勢物語の研究〔研究篇〕』（明治書院、昭和43年）五四八頁。

11　拙稿「『伊勢物語』第百二十一段――古注に登場する天照大神」（『東海女子短期大学紀要』第25号、平成11年3月）。

12　拙稿「神宮文庫蔵『伊勢物語注本』における万葉擬歌」（『三重大学日本語学文学』第8号、平成9年6月）。

13　『万葉集』の本文は、鶴久・森山隆編『萬葉集』（桜楓社、昭和47年）による。

14　『古今和歌集序聞書三流抄』（片桐洋一『中世古今集注釈書解題〔二〕』赤尾照文堂、昭和48年）。

15　『中世古今集注釈書解題〔二〕』。注14参照。

16　『和歌大辞典』（明治書院、昭和61年）。

17　注8参照。

18　『古今和歌集』本文は、『新編国歌大観』（角川書店、昭和58年）による。

19 『毘沙門堂本古今集注』（片桐洋一編、八木書店、平成10年）。本文は筆者翻字による。

20 沢井耐三校注『鴉鷺物語』（新日本古典文学大系『室町物語集　上』、岩波書店、平成元年）。

21 謡曲本文は、伊藤正義校注『謡曲集　上』（新潮日本古典集成、新潮社、昭和58年）による。

22 新潮日本古典集成『謡曲集　上』一一七頁頭注十五。注21参照。

23 『本草和名』に「牽牛子　和名阿佐加保」（『輔仁本草』巻十一、『続群書類従』第三十輯下　雑部　巻八九二）、『節用集』に「牽牛花」（杉本つとむ編著『早大本節用集――本文・研究・索引』雄山閣、昭和50年）とある。

24 市古貞次・大島建彦校注『曽我物語』（日本古典文学大系、岩波書店、昭和41年）。

25 片桐洋一『中世古今集注釈書解題〔一〕』赤尾照文堂、昭和48年）一〇六頁から一一〇頁。

26 『中世古今集注釈書解題〔二〕』九二頁。注14参照。

［きど　くにこ　東海女子短期大学教員］